

こどもの城 ニュース

KODOMO NO SIRO
NEWS



2005.12.15 No. 167 発行 / (こどもの城) 広報部 ☎03-3797-5674
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1



日中の暑さがやわらぎ、マニラ湾からの海風がさわやかに感じられる夕方になると、市内の市場は買い物客で活気をあびてくる。

露店の前にちょこんとすわり、野菜やマンゴーなどの果物を買う子。市場の中を歩き回り、大型の手さげぶくろやサンパギータと呼ばれる花かざりを買う子も多い。子どもたちは、みんなよく働く。南国特有のあまいかりをただよわせる花かざりを手に入れて、「売ったお金で学校で使うノートとペンをかうの!」と黒いひとみがキラリ。
(フィリピン/写真・文=平早勉)

【こどもの城】開館20周年記念シンポジウムから

こどもの城開館20周年記念シンポジウム
「子どもはどこで育つ?」

子どもはどこで育つ?

【こどもの城】開館20周年記念シンポジウム「子どもはどこで育つ?」が、11月1日に青山円形劇場で開かれました。アナウンサーの好本恵さんの司会で、「子どもはどこで育つ?」をテーマに4人のパネリストが短い講演を行ったのちに、ディスカッションを行いました。パネリストの講演テーマは以下のとおり(発言順)です。「子どもたちの自立をめざして」(神崎ゆう子さん/歌手)、「子どもの居場所づくりを」(久田邦明さん/神奈川大学講師)、「映画と子どもと客観的愛情についての短文」(川原圭敬さん/映画監督)、「子どもの発達と家庭の役割」(菅原ますみさん/お茶の水女子大学助教授)。
今月号では、4人のパネリストの講演のあらましを紹介します。(文責・編集部)



記録ではなく、記憶のなかに 子どもの姿をおいてあげるのが必要

わが家では5年生の男の子が育っています。仕事から家を空けることが多く、手をぬいているわけではないんですが、彼が育つことにあまりかかわっていません。彼のなかでは父は空気のような存在なんだと思います。3歳の時、4歳の時、5歳の時—それぞれの年齢で考えていた父親があったんだと思います。今、11歳になって、かなりシビリアンな意見を言うようになりました。



川原 圭敬さん (映画監督)

11年間をふりかえると、ぼくの親や祖父母のことを思い出して自分の子どもに接しているような気がします。さらに、ふと気づいたことは「客観的な愛情」—いつも距離をもって接していた彼に対し、ぼくは父親を自分で演出しながら演じていたのではないかとということです。彼が年齢を重ねるにつれて、そのシナリオもハードな内容になっていくように思いますし、これからも演じていくに違いないと思います。ときには、悪い父親も……。

運動会などで、デジカメやビデオカメラで撮影する人がたくさんいます。子どもたちは記録されるために走っているのではないんですよね。走っている子どもたちの姿を生で見てあげないのはもったいない。自分の肉眼で見て、記録ではなく記憶のなかに子どもの姿をおいてあげるのが必要ではないでしょうか。

育児の最終目標は“自立” “待つ”というようが大事



神崎 ゆう子さん (歌手)

オーディションに合格して歌のお姉さんになったのは、大学3年生の終わりころ。周りに小さい子どもがいなかったの、子どもについての知識はまったくありませんでした。番組の収録をおして、たくさんのすてきなお母さんに会いました。初めての場所(スタジオ)で、大きな着ぐるみを見て泣いてしまう子どもに、テレビに映らなくてもいいからと、まず子どもの不安な気持ちを受け入れてあげようとするお母さん—我が子に夢中になって周りが見えなくなって不安を受け入れるよゆうがないお母さんがいるなかで、子どもを受け入れることができるお母さんはすてきだなと思いました。

母になって9年。4年生と4歳の2人の男の子を育てています。下の子は服を着るときにシャツをきちんとズボンに入れることがうまくなっていますが、「まっ、なにかきっかけがあれば、いつか自分でできるようになるだろう」と、自分によゆうが生まれ、やっと育児が楽しいと思えるところ。育児の最終目標は「自立」だと考えています。そのためには、よゆうをもって「待つ」ということも大事なと思うようになりました。2人目なので、これからすることが予測できるからかもしれません。自立ということで、距離をおいて、客観的に見ることができるような母親になればいいなと思っています。

どこの街にも若いお母さんたちが 手助けしたいという人がいます

若いお母さんたちからみると、地域のおじさん、おばさん、おじいさん、おばあさん、青少年育成者と呼ばれるような人たちは、どうも付き合いにくい。しかられちゃうんじゃないか、注意されちゃうんじゃないか—と考えるかもしれません。そんなことはありません。各地を歩いた経験から確信をもっていることは、どこの街にも若いお母さんたちを手助けしたいと考え、実践している「いい人」がいます。

東京にも、子どもを連れてきてあすけ、お母さんは家のそうじ、友だちとお茶を飲みたい、だんなさんとデートする—など、なにをしてもいいという形で居場所づくりをしている高齢の方がいらっしゃいます。若いお母さんたちが苦勞していることをよく知っていて、こうすべきだ、こうでなくてははいけないという以前に、まず助けてあげなければいけない、ということで活動を始めたそうです。子どもをあずけていたお母さんが、手がからなくなったので手伝いさせてくださいと言ってきてくれた、としばらくしてうかがった時に聞きました。

若いお母さんたちのなかに、確実に「いい人」がいて、自分だけのことを考えないで、みんなのために子育ての環境や条件をよくしていくと活動している。それは、子育て広場づくりなどと呼ばれていて、それは「居場所」のひとつだと思います。



久田 邦明さん (神奈川大学講師)

親の役割は多様に変わっていつて 一つの家庭だけで満たすのは難しい

子ども側から期待される親の役割をまとめてみたいと思います。言葉が話せて二足歩行ができる1歳半ぐらまでの時期は、親は「生命維持装置」。安全・健康などを全面的に世話をしてくださるべく、自然なコミュニケーションで人間とはなにかを学んでいく基礎の時期です。

幼児期になると外の世界に出動するようになり、2歳ぐらになると、実力もないのに自分で、自分でと自己主張します。親にとっては最初の葛藤期ですが、自我が芽生えるところまで育ったということです。しかし、ルールは何も知りません。親の役割として「しつけ」をするということが始まります。この時期に、仲間集団での

学びが始まります。今の日本の子育てのなかで、家庭で満たすことができないところかもしれません。子どものなかでもまれ、父や母を安全基地としながら、外の世界が広がっていくと、次の思春期。もう一度大きく発達していきます。大人になろうかと考える時期なので、身近にいる親の生き方をみつけるようになります。子どもが大好きな親は、人生が充実している親。たがいに大人になるところまでいくのが、親子関係の発達だと思います。親の役割は多様に変わっていつて、一つの家庭だけでみるのが難しいことがあります。ゆるやかに地域に開放していくことが大事なのではないかと思っています。



菅原 ますみさん (お茶の水女子大学助教授)

元気にあそんでアツアツ!

2005-2006冬休み特別期間
12月23日(木)~1月9日(日) 12月28日(土)~1月2日(水) 12月11日(日)

TEL:03-3797-5666 FAX:03-3797-5676
http://www.kodomonosiro.or.jp/

150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
●渋谷駅西口より徒歩10分
●地下鉄有楽町線220口より徒歩6分

人と地球の、自然なサイクルのために。

人と自然が調和する持続可能な社会の実現をめざして、富士通グループ16万人、ひとりひとりの力をすべて結集します。私たちは、最先端のITと、環境テクノロジーをベースにお客さまにご提供する製品、ソリューション、マネジメントなど事業活動の全領域を通じて、さまざまな環境活動を行いながら、豊かな地球環境の未来を創造していきます。

すべてをグリーンにします
jp.fujitsu.com/about/eco



FUJITSU

THE POSSIBILITIES ARE INFINITE

